

## 中国少数民族の移動と共生：パネル総括

金縄, 初美  
西南学院大学国際文化学部

<https://doi.org/10.15017/2344798>

---

出版情報：九州人類学会報. 42, pp.68-70, 2015-06-05. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

セッション C  
中国少数民族の移動と共生  
—パネル総括—

金縄初美（西南学院大学国際文化学部）

I はじめに

本稿は 2014 年九州人類学研究会オータムセミナーのセッション C「中国少数民族の移動と共生」における各報告、コメント及び質疑応答を総括したものである。本稿の他、各報告者による研究報告、コメンテーターからの評論を合わせて本セッションの報告としたい。

「移動」「共生」この 2 つキーワードは、多くの論説で用いられているが、厳密に定義されていない。移動研究については、グローバル化に伴い、1990 年代半ばごろから文化人類学においても注目されてきた。

経済発展によって生活環境が変化した中国においては、1990 年代から移動や移住に焦点を当てた論考が多く見られるようになり、研究対象は漢族、華人及び少数民族、研究地域は北から南、そして国境地域と広範囲にわたっている。中国の周縁地域をフィールドとした研究においては、『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティ』[塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編 2001]、『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』[塚田誠之 2003]などが刊行され、周縁地域の民族の移動のプロセス、移住にともなって変化した民族関係、アイデンティティの揺らぎ、国家政策との関わりといった点が検討された。

本セッションはこれまで蓄積されてきた研究を視野に入れ、時間の経緯による移動形態の多様化に注目してその実態を明らかにし、「移動」によってもたらされた異文化接触を経て「共生」することは可能なのか、あるいは文化的階層による部分的「共生」は可能であるのか、また「共生」は理想であって実現不可能であるのか、といった問題を各報告の事例から考えることを目指した。

移動の背景として、教育、就労、通婚に焦点を当て、自発的であるか非自発的であるかも考慮しつつ、2000 年に深圳市に設立された「新疆高校クラス」の実態（アイネル・バラティ）、朝鮮族の移住の歴史的状況（玄龍雲）、モソ人の婚姻形態の変化による移動（金縄）という 3 事例を通じて、中国少数民族の移動の実態とアイデンティティの変化、及び「共

生」のあり方と課題について検討することを試みた。

## II 各報告の概要

各報告については、各報告者が執筆した研究報告を掲載するため、ここではテーマと概要のみを記す。

「中国雲南省摩梭（モソ）人の婚姻変化と移動」（金縄初美）では、1989年から進められた観光化による社会変化に伴って婚姻による移動が増加するなか、意識的に理想としての「共生」を求める動きがみられるが、現実との乖離があること、移動を繰り返す場合には婚姻家族形態の変化に対する認識が薄く、無意識のまま従来の家族婚姻形態が失われていることを報告した。

「中国漢民族居住地における『新疆高校クラスの実態』」（アイネル・バラティ）では、故郷の新疆を離れ、深圳市の「新疆高校クラス」に入学した生徒たちへの言語教育の実態と漢族居住地で中国語による教育をうける生徒たちのアイデンティティを考察し、言語教育政策において漢文化の影響を大いに受けることは、民族アイデンティティの維持に不利な要因となる反面、他者との接触により民族アイデンティティが高まったと結論づけた。

「中国朝鮮族の移動と共生—延辺朝鮮族自治州を中心に—」（玄龍雲）では、朝鮮族が移住の過程において、如何に「民族として」から「国民として」への生き方へ変換したかを分析し、異民族・多文化社会での共生という課題を検討した。

## III 総括

以上3報告に対し、コメンテーターの長谷千代子から以下の指摘があった。コメンテーターが執筆した評論も合わせて本セッションの報告とするため、ここではコメンテーターからの指摘とそれに対する応答を述べる。

まず、議論を展開するために必要な「共生」についての概念が定められていないという指摘である。「共生」という言葉は様々な分野で用いられているが、厳密に定義されたものとはなっていない。使い方を誤れば、「共生」という一言で矛盾や深刻な問題を覆い隠すことを可能にし、懐疑的な立場をとる論者も存在する。

当初、様々な領域で取り上げられるようになった「移動」や「共生」といったキーワー

ドについて、居住地環境の相違、文化的背景の相違、移動先での適応に見られる相違、移動理由の相違、そして移動を包括する社会状況による相違があり、様々な環境、様々な背景のもとでの「移動」を探り、「共生」は必ず可能となるといった前提を置かず、「中国の少数民族」というカテゴリーで考察し、いかなる形の「共生」概念が共有できるか議論することを試みた。よってアイネルは移動先での適応から移動元への自覚に着目したものであり、玄は朝鮮族という歴史的視座から民族形成そのものの過程に着眼し、金縄は比較的孤立した存在摩梭人が観光化によって民族意識に目覚める過程を婚姻変化から明らかにしようとした。それぞれ異なる着眼点から「移動」と「共生」についての共通理論が見つけれないかという試みであったが、先に述べたように、「共生」と「移動」についての概念設定に対する認識の共有ができず、単なる事例発表で終わってしまった。

さらに、「移動」をする背景として、漢族を中心とする移入者にも注意を払わなければならないし、「移動」の内訳、目的に関しても、もっと共有の認識を持つ必要があった。

また、セミナーでコメンテーターによって参考文献として挙げられたラフ族女性の遠隔地婚に関する論文を後日熟読したが、コメンテーターの指摘にあったように、今回の報告はジェンダーを切り口に議論を展開することによって、送り出す側に着眼点を置くことができ、他者との関わり方に対する考察から「共生」概念について認識を共有できたかもしれない。

本セッションでは、認識の共有不足、問題意識の共有不足によって、議論を展開することができなかった。これはコーディネーターの準備不足であり、反省している。今回、コーディネーターの難しさを痛感すると同時に、コメンテーターをはじめ、多くの人々から助言をいただいたことによって、課題を明確にすることができた。この事を今後の研究につなげていきたい。

(敬称略)

#### 【参照文献】

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族—中国南部の移住とエスニシティ』塚田誠之編、平凡社。

塚田誠之編

2003 『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社。

(2016年1月4日原稿掲載承認)